

# 奈文研 ニュース

No.43 Dec.2011

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所  
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1  
<http://www.nabunken.go.jp/>

## 所長就任にあたって



松村 恵司 所長

田辺征夫前所長の後を引き継ぎ、2011年10月1日付けで奈良文化財研究所の所長に就任しました。田辺前所長の6年半は、独立行政法人改革の荒波の中で、国立文化財機構の一施設として再スタートを切るなど、国の行財政

改革にともなう変革の期間でした。また、昨年は平城京遷都から1300年の記念すべき年を迎え、平城宮のシンボルである第一次大極殿の復原建物が完成し、平城宮跡を主会場に平城遷都1300年記念事業が盛大に開催されるなど、平城宮跡の重要性が広く国民の間に再認識されました。こうした時期に研究所の舵取りにあたられた田辺前所長のご努力とご労苦に改めて感謝申し上げます。

奈文研は、文化財の宝庫である古都奈良の地で、実物に即した総合研究を実施し、その調査研究成果を文化財保護行政に反映させる目的で、1952年に文化財保護委員会の付属機関として発足しました。その後、社会情勢の変化や時代の要請により、組織は拡充と変貌を遂げ、現在は、研究支援推進部、企画調整部、文化遺産部、都城発掘調査部、埋蔵文化財センター、飛鳥資料館の4部、1センター、1館体制で、文化財の調査研究、保存と活用に関する多角的な業務を進めています。来年で還暦、60周年の節目を迎ますが、この間、幾多の諸先輩が積み重ねた調査研究成果は、奈文研の愛称とともに広く社会に認知され、国内外から高い評価を得ているところです。

振り返ってみると、研究所の発展を支えてきた原動力は、考古学、文献史学、建築学、造園学、保存科学などの異なる分野の研究者が、一つのチームを組んで遺跡の発掘調査を遂行する奈文研特有の調査体制に基盤があると思います。こうした学際的な共同研究とチームワークをこれからも大切に維持し、地に足をつけた文化財の実践的、総合的な調査研究を推進していきたいと考えています。

独立行政法人制度の導入から10年が経過した現在、更なる独立行政法人改革により、制度や組織の見直しがおこなわれるなど、奈文研を取り巻く環境は一層厳しさを増しています。これを機に、改めて奈文研の存在意義や社会的役割、業務の必要性を自ら問い合わせ直し、足元を固めるとともに、これまでに蓄積した膨大な研究成果をわかりやすく社会に還元し、情報公開や行政サービスの質を高める努力が大切になると考えています。

また、今年は東日本大震災という未曾有の大災害が発生し、復旧・復興事業が最大の政治課題となっています。奈文研も被災文化財を救出する文化財レスキュー事業に積極的に取り組んできましたが、今後本格化する復興事業関連の文化財の調査や保存・修復事業にも積極的に協力していきたいと思います。

文化財は地域の歴史や伝統文化を今日に伝える貴重な遺産であり、地域の人々に大切に譲り伝えられてきました。被災文化財の復旧は、地域の絆を維持し再生する上で、重要な作業となるでしょう。

奈文研が抱える課題は山積していますが、今後も調査研究の質の向上を図るとともに、国内外の文化財の保存修復や技術者の人材育成に協力し、我が国の歴史や文化を広く国内外に発信する努力を続けていきたいと考えています。

今後とも皆様方の暖かいご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(所長 松村 恵司)

## 発掘調査の概要

### 藤原宮東面中門・東面大垣の調査(飛鳥藤原第168-2次)

藤原宮は周囲を掘立柱の大垣により区画され、東西南北には各々3つの宮城門があったとされます。今回の調査ではこのうち東面の中央門（建部門）とこれにとりつく東面大垣を検出しました。調査期間は2011年7月21日から8月30日までで、調査面積は200m<sup>2</sup>です。

調査では、まず、大垣推定位置で南北に並ぶ長辺2m、短辺1.5mほどの巨大な柱穴が予想どおり3基みつかりました。ところが大垣は調査区北側で途切れ、かわりに礫の詰まった穴が東西に3基ずつ2列並んでいました。これらは柱をのせる礎石の据付穴とみられ、この場所に礎石建物があったことを示します。東面大垣中央に設けられた礎石建物となると門以外に考えられません。東面中門の南妻部分とみて間違いないでしょう。宮城門の調査例は今回で6カ所ですが、本例は特に遺存状態が良好でした。

更に、2基の礎石据付穴を壊して掘られた土坑を断割調査した結果、中から巨大な礎石が2石みつかりました。藤原宮廃絶後に農地化の妨げとなった礎石を、穴を掘って落し込んだのでしょうか。礎石の大きさは藤原宮中枢部の礎石建物にも引けをとりません。東面中門がこうした建物に匹敵する規模と格式をもっていたことを教えているのでしょうか。

東面中門が将来その全貌を現せば、更なる成果がもたらされるでしょう。ご期待下さい。

(都城発掘調査部 森先一貴)



落し込まれた礎石（南から）

### 藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第169次)

2011年4月から11月中旬にかけて藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しました。本年の調査区は朝庭の中央北寄り（大極殿院南門の南約70m）に位置しています。朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の遺構を具体的に把握することを目的に調査をおこないました。

これまでの調査で、朝庭は径5～10cmの礫を敷き詰めて整備されたことがわかっています。今回の調査区内でも同様に礫敷を検出しましたが、全体的に礫の遺存状況は良くありませんでした。礫敷上では、礫敷と一体的に設けられた南北方向の石詰暗渠を検出ましたが、その他に遺構は確認されませんでした。この点は、今回の調査区の範囲がまさに広場の中央部分であったことを示すものといえます。

これに対して下層調査では、藤原宮の造営に先行して設置された朱雀大路やそれにそって並ぶ柱穴列、造営時の資材運搬に用いられた運河、掘立柱建物などを検出しました。先行朱雀大路や運河は、以前の調査で確認されていたものの延長部分にあたります。これまでに検出された運河の総延長は570m以上となりました。また、掘立柱建物は今回の調査区内で6棟を確認し、少なくとも3時期にわたって建て替えがなされたことがあきらかになりました。藤原宮中枢部にあたる朝庭の下層で多くの遺構を確認したことにより、藤原宮の造営過程をこれまで以上に詳しく復元していく手がかりが得られました。

なお、11月5日に開催した現地説明会には、降雨にもかかわらず、620人の参加者がありました。藤原宮の調査に多くの方々が関心を寄せていることを改めて実感しました。(都城発掘調査部 廣瀬覚)



調査区全景（東から）

## 興福寺北円堂南門・回廊の調査(平城第483 次)

興福寺では、1998年に策定された「興福寺境内整備基本構想」に基づき、寺觀の復原・整備が進められています。この整備事業にともない、都城発掘調査部では、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっており、本年度は北円堂の南門・回廊の調査をおこないました。調査期間は2011年7月1日～10月11日、調査面積は676m<sup>2</sup>です。

北円堂は、藤原不比等の一周年忌のため、養老5年（721）に造営された八角円堂で、『興福寺流記』などの文書から、周囲に回廊が巡り、正面に門が開いていたことがわかっています。建立以後、北円堂は永承4年（1049）、治承4年（1180）の2回罹災し、その都度再建されてきましたが、回廊については永承火災後の再建は確認されるものの、治承火災後の再建は明らかにされていません。以後、北円堂自体は数回の修理を受け現在まで残っていますが、回廊は江戸時代半ばには既に存在していなかったことが絵図などから読み取れます。このため、調査では、南門・回廊の遺構を確認することと、治承以後に回廊を再建していたのかどうかが焦点となりました。

調査の結果、凝灰岩製の基壇外装（地覆石）や礎石抜取穴を検出し、東面回廊全域と南面回廊の東半分、北面回廊の一部の遺構が残存していることを確認しました。南門より西側は、遺構面の削平が著しく、礎石の痕跡などは確認できませんでしたが、わずかに南門の基壇外装抜取溝を確認し、基壇の規模を推定することができました。検出した遺構を整理すると、回廊全体の規模は東西150尺（約43m）、



調査区全景（南東から）

南北147尺（約43.5m）となり、『興福寺流記』に記された北円堂回廊の規模に一致します。南門は柱位置などはわかりませんでしたが、基壇の規模は東西37尺（約10.9m）、南北27尺（約8.1m）と推定できます。

基壇外装を注意深く掘り下げていくと、検出した地覆石の内側に、古い地覆石の抜取溝を確認しました。つまり、検出した地覆石は、造営当初のものではなく、再建後のものだったわけです。石材が凝灰岩であることとあわせると、地覆石は永承火災後に再建されたものと考えられます。更に、この地覆石の内外では、火災によるとみられる焼土面や炭混りの土が広がっていました。地覆石の一部は、この焼土面を掘り込んで抜き取られていました。以上のこととあわせると、回廊は永承火災後に再建され、治承火災によって焼け、その後は再建されていなかつた、と考えることができます。

しかし、焼土面や炭混りの土の直上には、治承以後に造られたとされる鎌倉時代の瓦が、回廊の遺構に沿うように捨てられていました。もし治承火災以後に回廊が再建されていなかつたとすると、この瓦は一体どこからやってきたのでしょうか？回廊再建の問題は、今後、出土した大量の瓦の分析を待って検証していく予定です。（都城発掘調査部 大林潤）



東面回廊の凝灰岩製地覆石（北西から）

### 東大寺法華堂 八角二重須弥壇部材の年輪年代調査

東大寺法華堂では現在八角二重須弥壇（右線画）の解体修理がおこなわれています。これを機に、奈良文化財研究所では須弥壇部材の年輪年代を調査しました。

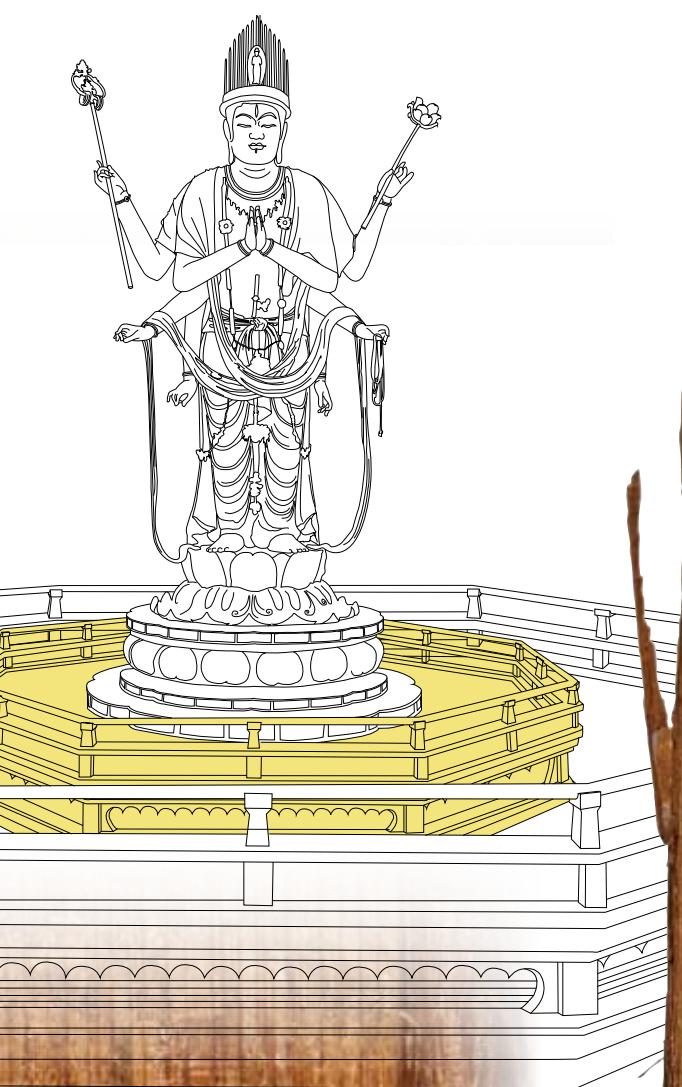
今回紹介するのは上中棟と呼ばれる上段（線画中の着色部分）を構成する部材の一つです。この材は幅10cmほどで253層の年輪を含み、もっとも狭い年輪幅は髪の毛よりも細い0.06mmとたいへん目のつんだ良材です。そのため計測には苦労をともないましたが、西暦729年の年輪年代が得られました。樹皮が残存することから、この年代は材の伐採年を示します。これまで須弥壇と壇上に立つ不空羈索觀音菩薩像の制作年代は8世紀半ばと考えられてきました。これを20年ほどさかのぼる今回の調査結果は、東大寺の複雑な成立過程を解き明かす新たな鍵となるかもしれません。

（埋蔵文化財センター 岐島 大輔）



年輪拡大写真（一目盛りは1ミリ）





6 37 38 39 40 41 42 43 44

上中棟部材（原寸大）

## キルギスにおける国際協力

奈良文化財研究所は、文化庁の文化遺産国際協力拠点交流事業の一環として、中央アジアのキルギス共和国で文化遺産調査に関する人材育成を、東京文化財研究所に協力しておこなっています。この事業は今年度から始まるもので、遺跡測量に関するワークショップを2011年10月6日から17日まで、キルギス共和国の首都ビシュケクのキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所およびビシュケクから東方へ車で1時間半ほどのところにあるアク・ベシム遺跡でおこないました。奈文研からは一部期間の参加者も含めると5名が参加し、中央アジア各国（カザフスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、キルギス）の12名（内キルギスが8名）の研修生に対して、講義と実際の測量実習とをおこないました。

アク・ベシム遺跡は、7世紀に玄奘三蔵が立ち寄ったスイヤーブに比定されている都市遺跡で、今までに仏教寺院やネストリウス派キリスト教寺院も発見されています。このように著名で東西交流の舞台となつた興味深い地で人材育成事業を進めることは、私たちにとっても学ぶことが多く、大変有意義と考えます。遺跡調査の最初に遺跡や周辺の詳細な地形測量が必要であるという、測量の意義が、測量機器の操作方法だけではなくて研修生に伝わったものと思っています。

本事業は、3年ないし4年間をかけて、測量、発掘調査、遺構保全、遺物整理、遺跡整備、報告書の作成といった諸点についての研修を1年に1回ないし2回のペースでおこなっていく予定となっており、奈文研は今後とも多くの部分にかかわって国際貢献に努める予定です。 （企画調整部 森本晋）



アク・ベシム遺跡における測量研修

## コロンビア大学との研究交流始まる

「奈文研ニュース」No.41（2011年6月発行）でもお伝えしましたが、奈良文化財研究所は本年3月に米国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所並びに建築・計画・保存大学院と研究協力および交流に関する覚書を交わしました。この研究協力と交流は2011年度から2015年度までの5年間にわたりおこなわれる予定ですが、初年度にあたる今年度は、奈文研から2名の研究者が、コロンビア大学で研究成果の口頭発表をおこない、先方の研究者と議論を交わしました。

研究発表は、9月27日の夕方からコロンビア大学ケントホールの一室でおこなわれました。まず、清水重敦景観研究室長が「Authenticity and Dismantling Repair System in Architectural Restoration in Japan（日本の建築修復における解体修理とオーセンティシティ）」という演題で、続いて石村智国際遺跡研究室研究員が「Memories of Sacred Landscape: Lost Female Rituals and Remaining Cultural Landscape in the Amami Islands, Southern Japan（聖なる景観の記憶：奄美の消えゆく女性祭祀と生き続ける文化的景観）」という演題で発表しました。会場には、建築学・日本文学・美術史学・宗教学などを専門とする先生方と学生の皆さんのが、あわせて40人ほど集まりました。

会場の皆さんには、真剣な面持ちで熱心に発表に聞き入っていました。それぞれの発表後の質疑応答では、鋭い質問も出て、活発な議論が交わされました。

コロンビア大学との研究交流では、今後も日本の文化財研究の成果を発信していく予定です。

（文化遺産部 青木達司）



研究発表の様子

## 特別名誉顧問と名誉顧問の委嘱

奈良文化財研究所は来年で創立 60 周年を迎えます。人間でいえば還暦であり、一つの節目ともいえます。奈文研は、創立以来日本の文化財保護行政に資する研究の重要な一翼を担ってきました。今年の東日本大震災における文化財レスキュー事業でも、総力をあげて支援活動に立ち上がり、奈文研の持つ知識と技術を役立てるよう努力しています。

また、奈文研の多方面におよぶさまざまな研究事業のうち重要な核としてきた平城宮跡の保存事業も、昨年の第一次大極殿の完成と平城遷都 1300 年祭の成功により、これもまた大きな節目を迎えました。近年では、文化財保護の国際支援・協力事業に対する要望が高まり、西アジア・東南アジアから中央アジアへと拡がりつつあります。

奈文研がこうした期待に応え、重要な役割を果たすことができるるのは、創立以来積み重ねてきた研究の蓄積だけでなく、奈文研を周りから支えていただいた方々のお陰であります。そこで、60 周年を迎えるにあたり、これまで強く奈文研を支援していただいた方への感謝の気持ちと今後のいっそうのご支援をお願いして、次の方々に特別名誉顧問、名誉顧問を委嘱することとしました。

### ・特別名誉顧問 奥野誠亮様

奥野様は、国の文化財保護制度の確立、平城宮跡の保存と第一次大極殿復原事業や奈文研現庁舎への移転に様々なご尽力をいただきました。

### ・名誉顧問 青山茂様

青山様は、創立以来一貫してご支援いただいてい



田辺前所長より委嘱状を渡される奥野特別名誉顧問

ますが、現在も飛鳥資料館懇談会の座長として、大所高所よりご指導を賜っています。

### ・名誉顧問 左野勝治様

左野様には、カンボジアなど海外での保存事業や高松塚古墳壁画保存事業など、奈文研がおこなう保存科学研究にかかわる重要な事業に絶大なご支援をいただいています。

奈文研は、今、独立行政法人国立文化財機構の一機関です。独法は国立の時代とは違い、自己努力が強く求められ、厳しい評価が課せられますが、同時に自由裁量で新たな事業に挑戦できるメリットもあります。このことは国の内外を問わず関係機関等との積極的な連携を可能にしています。こうした利点を生かして、文化財保護事業への一層の貢献をするため、今後とも顧問の皆様の広い視野からのご鞭撻をお願いする次第です。 (前所長 田辺 征夫)



田辺前所長より委嘱状を渡される青山名誉顧問



田辺前所長より委嘱状を渡される左野名誉顧問

## 飛鳥資料館冬期企画展「飛鳥の考古学2011」

飛鳥資料館では毎年新春に冬期企画展「飛鳥の考古学」と題しまして、飛鳥・藤原地域の発掘成果の速報展を各調査機関と連携しておこなってまいりました。2006年より続けてきました本展も、おかげさまで今年で無事6回目を迎えることができました。今年の「飛鳥の考古学2011」では、例年どおりの各調査機関の速報展の成果だけではなく、一区切りがついたものについては、これまでの成果と合わせて展示します。

また、2011年春には奥明日香の棚田が奈良県で初めて重要文化的景観に選定され、本年は、奥明日香にとっても重要な年となりました。この奥明日香の棚田の文化的景観についてもわかりやすく本展でもとりあげてみました。

例年とは違う「飛鳥の考古学」を新春の飛鳥資料館では是非お楽しみください。（飛鳥資料館 成田聖）

## 平城宮跡資料館 ロビー展示「文化財レスキュー事業についての紹介」

9月末から資料館のロビーで、文化財レスキュー事業に関する展示をおこなっています。3月11日におきた東日本大震災で、文化財も甚大な被害を受けました。そのため、各関係機関が連携し、文化財レスキュー事業を立ち上げました。

今回は、奈良文化財研究所がレスキュー事業でどのように活動したかを取り上げました。9月までに実施した場所や内容、レスキューの工程などを、写真や図をまじえて解説しています。

この展示をご覧いただき、活動にご理解、ご支援いただけましたら幸いです。（企画調整部 森先 奈々子）



ロビー展示のようす

### ■ お知らせ

#### 飛鳥資料館 冬期企画展

2012年1月20日(金)～2月26日(日)

#### 「飛鳥の考古学2011」

#### 平城宮跡資料館 春期特別展

2012年3月～5月（予定）

#### 「発掘速報展2011」

### ■ 記録

#### 埋蔵文化財担当者専門研修

##### ○保存科学I（金属製遺物）課程

2011年10月4日～13日 7名

##### ○保存科学II（木製遺物）課程

2011年10月13日～21日 6名

##### ○遺跡測量課程

2011年10月26日～11月2日 4名

##### ○遺跡情報記録調査課程

2011年11月14日～18日 8名

##### ○文化財写真課程

2011年11月28日～12月8日 12名

##### ○報告書作成課程

2011年12月8日～16日 11名

#### 第109回公開講演会

2011年10月15日 141名

#### 特別公開講演会（東京会場）

2011年12月3日 250名

### 現地説明会

#### ○飛鳥藤原第169次発掘調査（藤原宮朝堂院朝庭）

2011年11月5日 620名

#### ○平城第486次発掘調査

（平城京跡左京三条一坊一坪）

2011年11月19日 200名

#### 飛鳥資料館 秋期特別展

2011年10月14日～11月27日

#### 「飛鳥遺珍－残された至宝たち－」 10,454名

#### 平城宮跡資料館 秋期特別展

2011年10月18日～11月27日

#### 「地下の正倉院展－コトバと木簡－」 20,120名

### ■ 最近の本

#### ○奈良文化財研究所特別講演会収録集

##### 『古代はいま』

クバプロ 2011年12月

##### ○『官衛・集落と鉄』

クバプロ 2011年12月

##### ○芝 康次郎 『九州における細石刃石器群の研究』

六一書房 2011年12月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2011年12月